

(肝属郡高山町後田山下)

位置と環境

高山町市街地の南南西約6kmに位置し、吾平町との境に近い標高約50mのシラス台地縁辺部に立地する。遺跡の周辺には昭和40年代に基盤整備事業が実施された畑地が広がっており、畑地には土器などの遺物が散布している。

調査の経緯

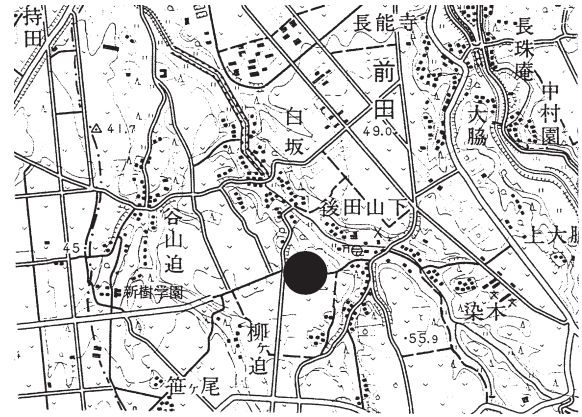
広域農道の建設事業が計画されたことに伴って、高山町教育委員会が鹿児島県教育委員会の協力を得て平成2年度に確認調査、平成4年度から6年度にかけて確認調査と本調査を実施した。

遺構と遺物

縄文時代の遺物は、早期の前平式土器、塞ノ神式土器、手向山式土器、前期の轟式土器、中期の春日式土器、船元式土器、後期の岩崎式土器、指宿式土器など縄文時代全般にわたる土器が出土した。

古墳時代の遺物包含層は過去の基盤整備事業によってほとんど削平されていたが、方形の竪穴住居跡3軒が発見された。それぞれの住居跡の大きさは、1号竪穴住居跡が4.2m×3.8m、2号竪穴住居跡が2.8m×3.0mで、3号竪穴住居跡は一部しか残存していなかったが、一辺が5.4m程度の大きな住居跡であった。1号竪穴住居跡の床面中央には、炉の跡と思われる焼土が確認された。しかし、いずれの住居跡からも明確な柱穴は発見されなかった。

住居跡内からは、甕形土器、壺形土器、高坏、鉢形土器、埴等の多量の土器が出土した。この時期の南九州一帯では、絡縄突帯を特徴とする成川式土器



第1図 後田山下遺跡の位置

と呼ばれる土器が一般的である。ところが、本遺跡では成川式土器はほとんど出土せず、土師器の器形を模した土器が多く見られる。高坏は5世紀中頃に比定される串良町岡崎4号墳の主体部から出土した資料に類似している。

特徴

住居跡から出土した土器は、九州の東海岸を南下してきた古墳文化に属するもので、成川式土器とは異なっており、南九州のこの時期の文化の多様性を物語っている。

資料の所在

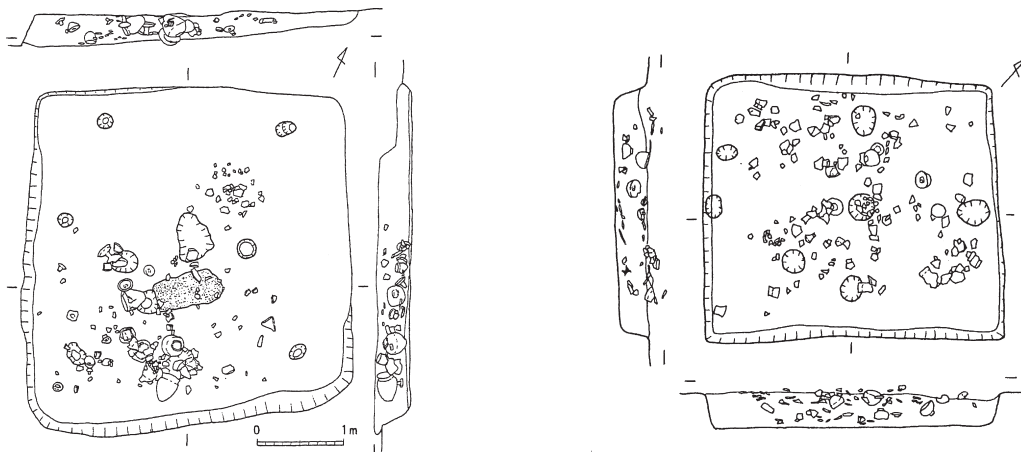
出土遺物は、高山町歴史民俗資料館に保管されている。

参考文献

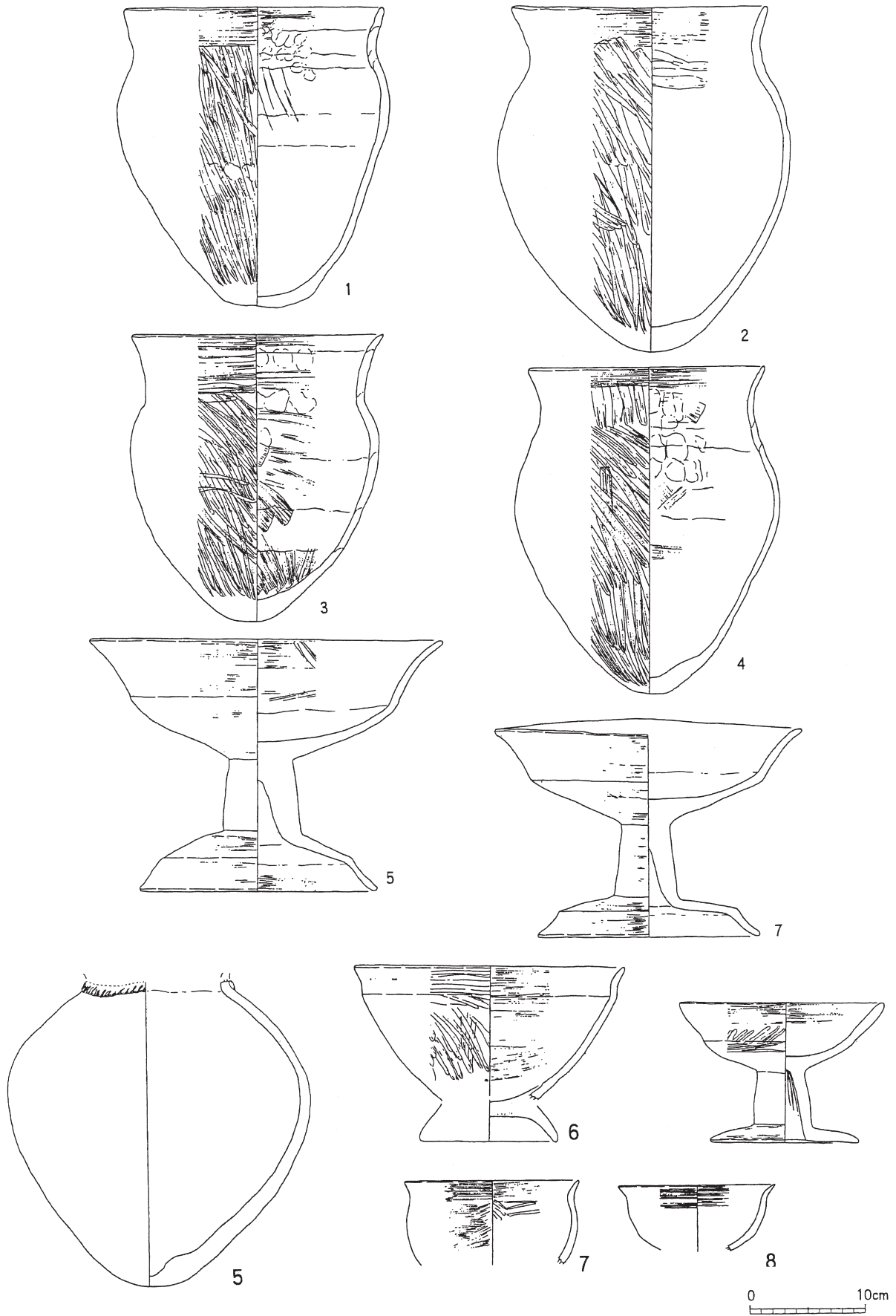
高山町教育委員会1991「後田山下遺跡」『高山町埋蔵文化財発掘調査報告書』3

高山町教育委員会1997「後田山下遺跡2」『高山町埋蔵文化財発掘調査報告書』5

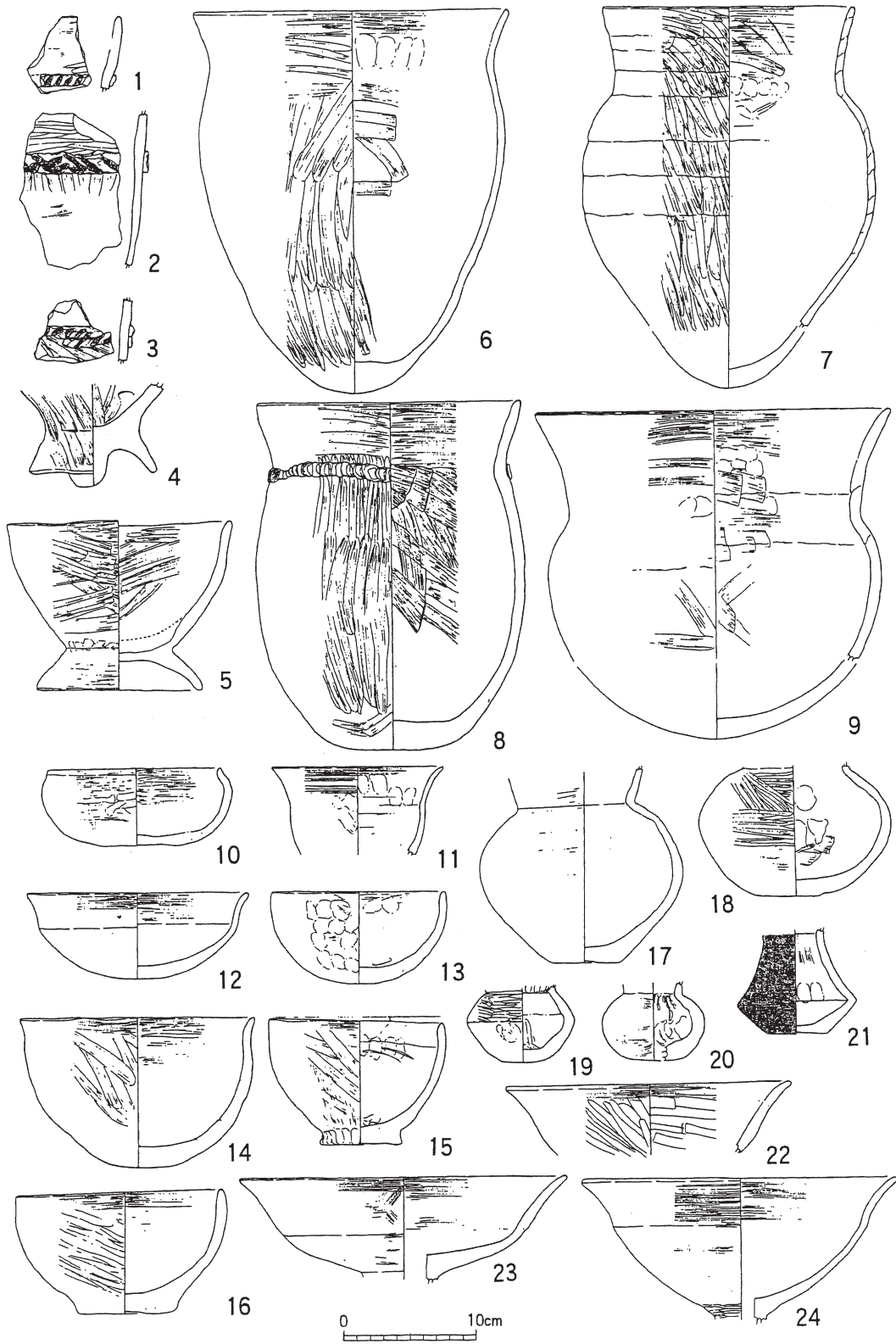
(児玉健一郎)



第2図 1号竪穴住居跡と2号竪穴住居跡



第3図 1号竖穴住居跡の遺物



第4図 2号竖穴住居跡の遺物